

麦 作

「北海道 麦作りに挑む人々」その8

訓子府町字高園 <sup>さ</sup>佐 <sup>とう</sup>藤 <sup>はる</sup>晴 <sup>お</sup>生

1. はじめに

オホーツク総合振興局は、主な振興局における秋まき小麦（以下、小麦）の反収（21～27年までの最高、最低を除いた5年平均）で、トップの座にある。（図1）。

その中でも訓子府町の小麦生産は、斜網に次ぐ高収量地帯となっている。

特に、この地に入植して4代目の佐藤晴生氏（41才）は、祖父の頃から種子ばれいしょ生産を行っていることもあり、輪作体系には人一倍気を使ってきた。また、最近ではたまねぎの一部にも小麦を取り入れ、文字どおり輪作体系の要として小麦を位置付けて高反収を得ている。その佐藤氏の小麦栽培について紹介する。

2. 地域の特徴および経営概要

(1) 訓子府町の気象および土壌条件

土壌は、黒ボク土あるいは多湿黒ボク土に分類される。台地上の軽石流堆積物やその二次堆積物の上に火山灰が堆積したもので、表層に腐植を多く含み、下層は堅く、排水はやや不良である。

佐藤氏が住む高園地区は、訓子府町の高台地区にあり、好天時には東に知床連山、西に大雪山系、南に釧北山脈を見渡せる一角にある。

内陸部のため気候は寒暖差が激しく、夏の最高気温は30℃以上、冬の最低気温はマイナス20℃以下にも達する。年間降水量は日本では最も少ない地域で、日照にも恵まれている。

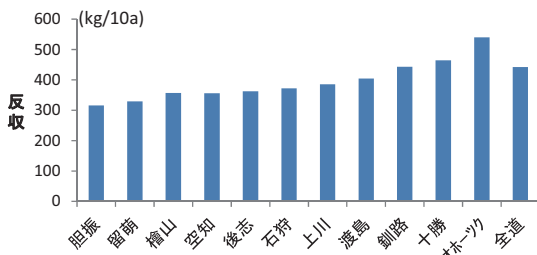


図1 主要な振興局の反収

(H21～27年 7中5)

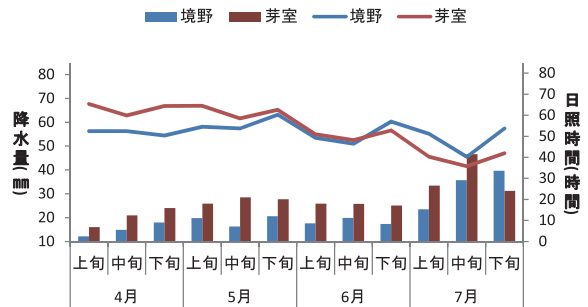


図2 2地区の降水量と日照時間の比較

(アメダス1981～2010年の平均)

左、棒グラフ～降水量、右、折れ線～日照時間



佐藤氏家族

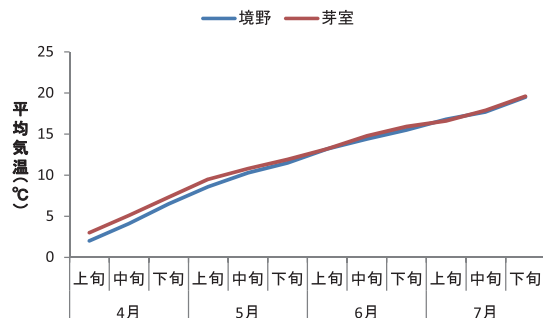


図3 2地区の平均気温の比較

(アメダス1981～2010年の平均)

積雪量は北海道内としては少ない地域である。

(図 2、3)

(2) 経営規模と作付け構成

佐藤氏の家族は、90歳の祖母と父母、そして妻と2人の子供の7人である。面積は、19.6haで畑作+野菜の複合経営である。作物

は、小麦、てんさい、加工用スイートコーン、種子ばれいしょ、たまねぎを栽培している。各作物の面積と輪作体系は、表1、図4、5のとおり。

3. 小麦栽培の経過と特徴

(1) 祖父の代からの小麦栽培

祖父の頃から小麦を栽培し現在に至っている。以前は、小麦の種子生産にも手がけ、手刈りやバインダーでの収穫やビニールハウスを使った乾燥・調製の経験もある。しかし、昨年のように1ト取りに近い反収は夢のようだと感慨深げにお父さんは話された。

(2) 収量・品質

かつての小麦栽培は、栽培技術や品種の特性など解らないことが多く、播種量でも12~13kg/10aと現在より多いのが一般的であった。その結果、穂数過多により倒伏が頻繁に発生した。それと同時に、穂発芽の発生もあり被害が大きかった。また、「きたほなみ」に変わってからも栽培技術や品種の特性が良くつかめず、不安定な生産が続いた。現在の播種量8kg/10a前後になって(表2)、ようやく安定した反収となったと言う。

佐藤氏の3年間(平成25~27年産)の平均

表1 作付割合 (H28年)

作物名	品 種	作付面積 (ha)	作付割合 (%)
小麦	きたほなみ	4.06	21
てんさい	-	4.0	20
加工用スイートコーン	-	2.3	12
ばれいしょ (種子)	男しゃく薯、さやか、きたひめ	3.0	15
たまねぎ	-	6.2	32
合計	-	19.6	100

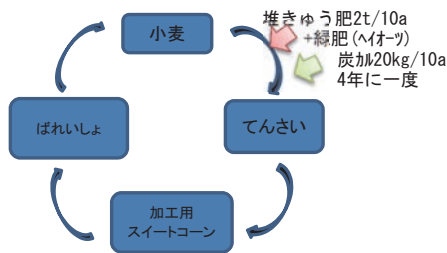


図4 平成27年までの輪作体系

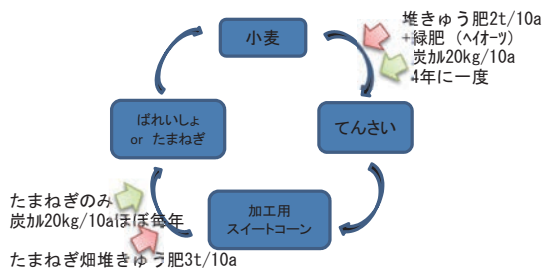


図5 平成28年からの輪作体系

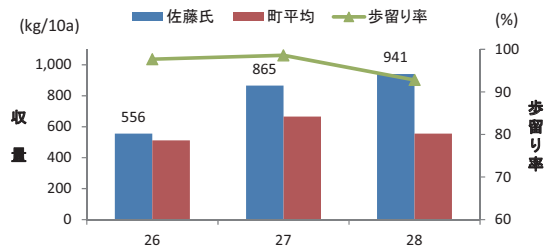


図6 佐藤氏と町との反収と歩留り率の推移

表2 耕種概要など (H28年産)

期	は 種 (kg/10a)		土性	施 肥 (kg/10a)				根雪始	雪腐病防除		
	量	方法		区分	窒素	磷酸	加里		月日	時期	使用薬剤名
9月25日	8kg/10a	畦幅30cm	火山性土	基肥	5.6	15.4	2.8	9月25日	H27. 11. 22	H27. 11. 5	フロンサイド水和剤
				追肥	7.35			4月14日			
					8.4			5月8日			
					7.35	2.25	1.5	6月2日			
合計			28.7	17.7	4.3						

表 3 品質測定値 (28年産)

容積重 (g/ℓ)	F.N.(sec)	蛋白含量 (%)	灰分含量 (%)
861	418	11.3	1.47

表 4 病害虫防除等 (H28年産)

除草剤散布		融雪期	病害虫防除 (植物成長調整剤等)			備考
時期	剤名・散布量		対象病害虫防除	時期	使用薬剤・散布量	
10月7日	ガレース乳剤 150ml/10a	4月2日	植物成長調整剤	5月19日	サイコセルPRO・300ml	
			うどんこ・赤さび病	5月28日	チルト乳剤25 1000倍	
			赤かび病	6月14日	シルバキュアフロアブル 2000倍	
			赤かび病	6月21日	ベフトップフロアブル 800倍	
			赤かび病・アブラムシ	7月9日	チルト乳剤25 1000倍+ モスピランSL液剤 5000倍	

反収は、711kg/10aと町平均の1.2倍と高い。3年間の製品歩留り率では96%と高く(図6)、平成28年産の小麦品質評価項目でも、1等Aランクの格付けとなった。(表3)

しかし、図6を見て分かるように平成26年の反収が低かったのは、ラジコンヘリ利用による雪腐病防除の失敗が原因であった。薬剤が均一に散布されずに雪腐病が多発し、農耕寸前の状態に落ち入り、最終的に十分な穂数を確保できずに反収が大きく落ち込んだ。

## 4. 技術の特徴

### (1) 基盤整備の徹底

どんな土地条件のところに入植するかは、その後の農家経営や家族労働に大きく左右する。しかし、全ての条件を把握して入植することは困難と思われる。

入植当時と変わらない現在地は、自宅を挟んで南北二つに沢があり、幼少の頃には、魚釣りやザリガニを捕まえて遊んだというほど水が流れていた。そのため、沢つたいに傾斜した土地が多く、表土も薄く粘土層が近かったため排水が悪かった。雨後には、周辺の農家に比べ2～3日も遅れての作業を余儀なくされた。加えて透・排水性不良は、当然作物の成長にも影響を及ぼした。

作業の遅れに対しては、夜なべして何とか

補うことはできたが、収量を補う手立ては少なかったと当時を振り返る。

そんな経験の中から、基盤整備の必要性を身に染みて感じたお父さんは、昭和59年から均平事業や暗きょ整備事業を継続し、ようやく昨年2回目の暗きょ工事で一通り目途がついた。

自宅周辺の航空写真を見ると、見違えるほど真っ平な農地に生まれ変わっている。この農地の状態に辿り着くまでに、約30年の月日を要した。最近その成果がやっと表れだしたという。

### (2) 堆きゅう肥などの施用による土づくり

均平工事は、表土を削り、客土を入れるために作物生産にとって一時的にマイナスとなる事が多い。それを補うためにも、堆きゅう肥の施用などによる土づくりが必須だった。

堆きゅう肥の入手先は、以前は町外からであったが、現在は町内の酪農家から運んでもらっている。10トンのダンプで約30台。300トンを優に超える堆きゅう肥を麦稈と交換する。酪農家で1年寝かした堆きゅう肥を、さらに自家の堆肥場に運び1年寝かせる。ほぼ完熟した堆きゅう肥を、小麦の収穫後に2ト/10a、そして、たまねぎの作付け前に3ト/10a施用している。

また、炭カルなどの土壌改良剤も同じタイミングで、小麦収穫後には4年に一度位に20kg/10a、たまねぎの栽培前には、毎年20kg/10aずつ施用している。その他の資材は、土壌診断の結果により小麦の作付け前にハイグリーン（銅などの微量要素入り）を25kg/10a程度を施用し続けている。

最近になって、やっと人並みに取れるようになってきたと感じている。

### (3) そうか病対策としてたまねぎを導入

10年前までは、畑作専門経営であった。しかし、そうか病の多発するほ場があって、そのほ場に回ってくると決まってそうか病が多発した。種子ばれいしょの生産ということもあり、種子として出荷できず、全量でん粉原料用に泣く泣く出荷した年もあった。経済的な痛手も大きかったので、そうか病が多発するほ場全面をたまねぎ栽培に切り替えた。その分、ばれいしょの面積が半減したこともあり、それ以来そうか病の悩みから解消された。

現在では、輪作体系の一部としてたまねぎも組み入れている。たまねぎ後の小麦の生育は、とても良く高反収にも貢献している。

### (4) 播種床の作り方

出芽を揃えるには、播種床づくりの手は抜けない。そのため、小麦の前作物によってその工程は変わってくる。

ばれいしょやたまねぎ後の場合は、以下のとおりである。

- ① サブソイラ 1回
- ② スプリングハロ 1回
- ③ ロータリ 1回

また、スイートコーン後は以下のとおりである。

- ① 硫安散布 (20kg/10a)
- ② ロータリ 2回深さ約10cm (攪拌する)
- ③ プラウ耕 深さ25~30cm

特に、スイートコーン後は、カラが多いので播種量は、ばれいしょ後よりも1kg/10a程度多く播いている。

### (5) 畑作専門部の活動で共に学ぶ\*

本人曰く、「これまで営農を続けてこられたのは、畑作専門部の活動をとおしてほ場を見たり、意見交換できたのが大きな財産となった」という。

畑作専門部の活動は、基本的に技術の交換、研修を図ることを目的にし、毎年学習会や作物試験を行っている。今年で36年の歴史を迎えている。

畑作専門部員は41名で、4班に分かれて試験圃を設置し、畑作専門部を中心にJAの担当者と普及センターの協力により生育・収量調査、試験成績をまとめ発表会を開催し研鑽を深めている。

訓子府町は、近隣の市町村に比べ比較的的反収が高いのは、この学習組織の地道な活動によるところも大きいと思われる。(図7)

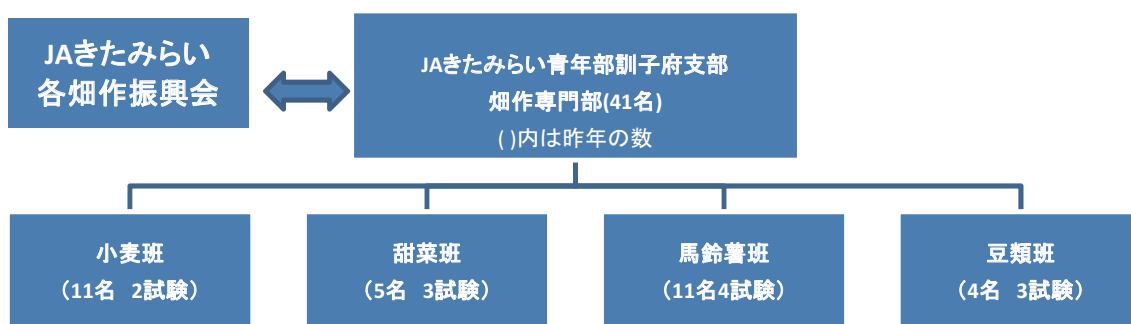


図7 畑作専門部の組織

## 5. おわりに

佐藤氏の祖父は、59歳の若さで病死した。その時、お父さんは、35歳であった。しかし、町内にある高校に通学しながら実際に農業を手伝っていたので、スムーズに農業を引き継ぐことができたのは幸いな事であった。

祖母は自分のことは自分でやりたいとの思いから60歳にして自動車免許を2か月で習得。町までの買い物などは、家族に頼らず自分で車を取り回して用を足してきた。89歳を期に、まだまだピンピンしているものの事故が起きてからでは遅いということで、家族の説得を受け免許証を返上した。今は、大好きなゲートボールの送迎をお父さんが担っている。

前述したように、同じ地区に比べ土地条件に恵まれず、1/4の自己負担をいとわず国や道の整備事業を利用して工事を続けた。また、作業の遅れは夜なべしてでも行った。特にお父さん、お母さんの御苦勞は並大抵ではなかったと想像できる。

整備事業や家の負債もようやく昨年完済し、無事息子に引き継ぐことが出来たと安堵して

いる姿が印象的だった。

### <佐藤氏のコメント>

畑作青年部をとおして、部会員の試験圃場を沢山見ることが出来た。それが自分にとって大きな財産となっている。この経験知を基に仲間と共に今後とも研鑽を重ねていきたい。

(文責 北海道米麦改良協会 高橋義雄)

### \*畑作専門部規約

- ①訓子府町で畑作を営む青年部層の組織
- ②相互の理解と協力をもって、技術の交換、研修を図る
- ③昭和57年度（1982年度）より活動
- ④加入、脱退に関して年齢制限は設けていない

### <活動内容>

- ①学習会
- ②作物試験（小麦、馬鈴薯、甜菜、豆類）
- ③道内視察研修
- ④プロジェクト活動